

住宅名人  
十番勝負  
ROUND 6  
「カーテン」

日  
常  
と  
い  
う

劇  
場

田  
口  
知  
子

ONZONO  
建築設計事務所

深谷のように、起伏に富んだ空間。  
カーテンを掛けなくても、  
周囲の目を気にせず伸びやかに  
空や緑を楽しみながら暮らせる。



〔上〕1階はご主人の書斎以外がりとつながり、床の位置が地面よりも半層ほど高く、ダイニングの床は上部に設けたため、カーテンを掛けなくても道路を往来する人の視線を気にせず済む。また、ダイニングの床に近い位置に設けた小窓やリビングの幅窓から空気を取り込むと、中央上部の吹き抜けを通って2階のガラスに面した窓から外に抜ける。建て主は夏の間もほとんどエアコンを使わなかったという。この家は、不等辺四角形を意味する「TRAPEZIUM」と名づけられている。〔高〕2階へ上がる階段からリビングを見下ろす。〔下〕キッチンからダイニングを見る。道路側の壁厚は150センチ



「起伏に富んだ」形状だ。書斎と寝室はどちらも2畳ほどしかない。田口さんは、「主人が創作活動に没頭する場所は穴蔵のようにこもれる空間がいいと考えた。そ

と、さらに決意し、1階を見下ろす下を設けているような気分になるのが新鮮だ。ここは、「建築的ではない体験が得られる家をつくりたい」と語る田口知子さんが設計した、東京都世田谷区に建つ住宅である。建て主は夫婦2人暮らし。ご主人は演劇のための音楽をつくる仕事をしていたこともあり、その関係の友人が多い。新築する裏に小さなホールを望んだのは、仲間が自由に演劇や音楽を発表できる場をもちたかったからだ。もう一つの希望は、窓にカーテンを掛けなくても周囲の目を気にせず暮らせること。ほかには「田口さんがおもしろいと思うように設計してください」と言われたという。

田口さんは地階にホール、1階にリビングとダイニングとキッチンとご主人の書斎、2階に「夫婦それぞれの実室と洗面浴室とルーフトラスを配置した、ホールを半地下にして1階の床の高さを周囲の家とずらし、さらに道路側のダイニングとキッチンの窓を高い位置に設けて、カーテンを掛けなくてもいいようにしている。リビングとダイニングの間は段差をつけて空間に変化を与え、2階は階段が二股に分かれた先に、妻さまの寝室と洗面浴室がある。ご主人は自分の寝室に、その階段の途中から納戸を造って入ることのできるが、もっぱら1階の書斎からはいしご階段をよじ登って入ることのほうが多い。この家はそんな起伏に富んだ形状だ。

書斎と寝室はどちらも2畳ほどしかない。田口さんは、「主人が創作活動に没頭する場所は穴蔵のよう

DATA

- 敷地面積 / 102.58㎡(31.1坪)
- 延床面積 / 135.61㎡(41.1坪)
- 地盤 / 46.60㎡(14.1坪)
- 1階 / 50.21㎡(15.2坪)
- 2階 / 38.8㎡(11.7坪)
- 用途地域 / 第1種住居専用地域
- 容積率 / 56.58%(許容60%)
- 容積率 / 132.20%(許容200%)
- 構造 / RC造
- 設計 / 田口知子 (田口知子建築設計事務所) T109-0041
- 東京都港区森有会 1-5-6-702
- 03-5545-5936
- 施工 / 山崎工務店
- 048-683-6524
- 竣工 / 2009年6月



右が1階の書斎で、奥のほして階段を上ると2階の個室(左)に入る。壁の高さいっぱいには本棚を設け付け、吹き抜け部分に透明な可動床を設けた

こに遊び心も加わり、「ロッククラ イミングのように、壁を伝って個室 上がる案が生まれた。2つの場所は 吹き抜けを介してつながり、トッ プライトから光が入るので、狭小には 感じない。もちろん、この提案は建 て主の性質に呼応していること。実際 にご主人は上下の行き来を楽しんで いるという。

この家は、地形的な要素を取り入 れることで「日常の体験を楽しく、 豊かにする場をつくりたい」とする 田口さんの考えが獨断に表れている が、それだけではない。立体的な空 間構成は、視線の抜けや風通しなど を考慮した結果でもある。たとえば 空気は自然な対流を起すには、下 から上への風の道をつくることか鉄 則だ。この家も、1階の窓から取 り入れた空気が吹き抜けを過って 2階に抜けるようにしてある。「健 康に暮らすには、風や光が感じられ ることは欠かせませんから」。それ も、田口さんの強い思いである。



[上]ダイニングの窓より下は「地形的に」考え、コンクリートの打ち筋にした。居住スペースへのアプローチは、その地形に合わせて、ホールへと下りていくアプローチは開口を広くとり通路際に木を挿入した。柔らかな照明、奥へと呼び込む意味合いももたらためた (右)2階の居室から洗面所が見える。浴室からも外の風景を楽しめる

## 田口知子

TAGUCHI TOMOKO

1990年、東京大学工学部建築学科卒業後、長谷川浩子・建築計画工房に勤務。2000年、田口知子建築設計事務所設立。現在、日本大学、東京理科大学非常勤講師

### 気持ちを解放させ、 豊かな体験が得られる 住宅をつくっていく

#### “場の集合体”が住宅になる

家ならば住む人、建物ならば使う人が、そこでの体験に楽しさや豊かさが得られる空間をつくりたいと思う。たとえば、対角線に視線を通すことで実面以上の広がりをもたせる。風の通り道をつくって空気を動かし、その変化を感じてもらう。これらは機能面でもあるので、どの家でも当たり前に取り入れていること。さらに、自分が子どものころに外で遊んで楽しんだ、それと同じような体験ができる要素を、建

て木の性質に応じて取り扱っている。子どもに買ったかのように無邪気にその場を楽しむ要素は、心を解放し、伸び伸びとさせる効果があると思うからだ。私の興味はつくった建物で人がどのように喜んでくれるか、そこで人がどんな気持ちでどう行動するかにある。だから、建物をつくるというよりもむしろ、どれだけ多様な場をつくるかに力を入れている。その集合体が結果として、1つの家や建物になるのだ。



【左】「赤い家の家」では、リビングダイニングの一角で、2階の子どもの部屋に続く階段の途中にワークスペースをついた。キッチンからも音が響き、吹き抜けを介して子ども部屋とも連動する（右）広島に設計した「三角形の家」は、敷地が三角形であることを生かし、活動的に過ごす領域と、静かに過ごす領域を2層に分け、その間に中庭に向かって開く場所を設けた。「設計の定額」は敷地の特性を読み取ることから始まる」と田口さんは話す



OZONEのコンペを経て設計した「千駄木の家」。写真は3階にある書斎と個室で、吹き抜けを介して2階のダイニングにつながる。書斎の本棚の一部に、ダイニングを見下ろせる小窓があるのが田口さんらしい



横浜市内に建つ「DECK HOUSE」は、海が見える屋上でパーティを開きたい、高いところに住みたいという建て主の希望をかなえた家